

サーチライト With Pastor Jon 黙示録 第5章 パート2

このメッセージはアップルゲート クリスチャン フェローシップの、ジョン・コーソン牧師が公開したメッセージを、アメリカ在住の日本人クリスチャン木下言波が翻訳して YOUTUBE やブログに上げたものを文字化したものです。世界的なインターネット規制が始まろうとしています。私達はその日のために、文字にして紙に記録するの必要を感じました。また、インターネットに不慣れな方や字幕を追って読むのが困難な方のためにも必要があると主に迫られたと感じます。

※インターネットのメッセージを、文章化するこの働きを始めた姉妹が、現在目を患って治療中です。どうか、りょくさんの為にも、お祈りください。

「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」ヘブル4:7

メッセージ by ジョン・コーソン牧師 アップルゲート クリスチャン フェローシップ

<http://joncourson.com/>

7590 Highway 238 Jacksonville, OR 97530

訳 by 木下言波 DivineUS : <https://www.youtube.com/user/TheDivineUs>

筆記 by Rin

私は激しく泣いていた。(黙示録 5:4)

すると、長老のひとりが、私に言った。「泣いてはいけない。見なさい。ユダ族から出たしし、ダビデの根が勝利を得たので、その巻き物を開いて、七つの封印を解くことができます。」(黙示録 5:5)

この2つの表現、「ユダ族から出たしし」と「ダビデの根」はユダヤの表現です。

「ユダ族から出たしし」はシロの預言にさかのぼります。

創世記 49章を急いで開いて下さい。

ここはヤコブの12人の息子たちが、イスラエルの12部族になる場面で、ヤコブは彼らを祝福しています。

ユダの番が来た時、彼は「ユダは獅子の子」(創世記 49:9) と言い、続けて預言的な発言をしました。

「王権はユダを離れず、統治者の杖はその足の間を離れることはない。

ついにシロが来て、国々の民は彼に従う。」(創世記 49:10)

これは驚く預言です。

シロがくるまで王権はユダを離れない。

シロとはメシアのことで、最終的にメシアが来るといことです。

確かにイエスはユダ族から出ました。

ときはAD12年の春。

当時世を治めていたローマ帝国が、突然「今後、ユダヤ人は死刑執行ができない。」と宣言しました。その地域でユダヤ人と彼らの宗教との間にあった問題のために、ローマ帝国はユダヤ人から死刑執行の権利を剥奪したのです。

ユダヤ人は、ノアの時代から、死刑は統治のカギだと信じていました。

洪水の後、神がノアに告げた事を覚えていますか。

「ノア契約」と言われているものです。

「人の命を奪った者は、その命も奪われる。自分で責任を負うのだ。」

これはまた別の論点になるので今日はこれ以上掘り下げませんが、これにより、ノアの時代から死刑がユダヤ人の統治の基本となっていました。

そしてAD12年、ローマ帝国の「ユダヤ人は、今後一切死刑を執行してはならない。」という宣言をラビたちが聞いた時、彼らはエルサレムの道を駆け下り、衣を裂いて灰をまき、胸を打ち叩いて嘆き悲しみました。

町全体が嘆き悲しむラビたちでいっぱいだった。

とんでもない事が起こるということが分かっていたからです。

彼らは「シロが来るまで王権はユダを離れない。」という創世記49章の預言を知っていました。

しかし死刑の権利が剥奪されるということは、今や彼らに王権はないということ。

しかもメシアはまだ来ていない。

「ああ!! 死刑執行権、統治権が奪われてしまった! メシアはまだ来ていないのに王権が離れてしまった!」

まさにその時、エルサレムの神殿に誰がいたか分かりますか。

12歳の少年が、そこで律法学者や思想家たちを狼狽させていました。

イエシュア、イエスです。

「メシアが来るまで王権が離れることはない。」

丁度その時、エルサレムに来たのはイエス!

こういうの、大好きです。ただただ驚きですよ。ね。「ウォ!ウォ!」

私たちも時々、「主よ、どこにおられるのですか!？」と、灰を撒き散らして嘆き悲しみ、衣を裂くようなことがあります。

私たちには分からないかもしれない。はっきりと見えないかもしれない。

でも主はそこにいて、全てのことが見事に完璧に整って行くのです。

AD12年の春、ユダヤ人はローマ帝国によって死刑執行権を剥奪されました。

だからイエスは十字架にかけられたのです。

十字架はローマの死刑の方法だから。

ポンテオ・ピラトは関わりたくありませんでした。

「キリストに関することは、あなた方でやりなさい！」

「それは法に反することです。我々にはできません。」

大した偽善者たちではありませんか。

姦淫の女を捕まえた時、彼らはユダヤの死刑である石打ちの刑にしようとしたのに。

でもこれで預言が成就されたのです。

今日はこれ以上深みに行けません、イエスは十字架で死ななければなりません。そしてユダヤ人たちは自分たちの望み通りに、総督ピラトが最終的に十字架刑の判決を下すようにもっていきました。

以上が「ユダ族から出たしし」。ユダヤ的表現。王権。

黙示録 5:5 に戻ると、彼はまた「ダビデの根」でもあります。

これもユダヤ的表現で、イエスは“ダビデの子”ですが、同時に“ダビデの根”です。

ダビデがイエスから出ているから。

「ちょっと待って！」と言いたいでしょう。

「どうやって、ダビデから出たイエスからダビデが出てくる？」

イエスはダビデの家系に生まれました。

しかし、彼はダビデよりも前に、既に存在していました。

ここで永遠について話しましょう。

キリスト・イエス。

主はイエスとしてこの世に来る前から当然存在していました。

始まりはありません。彼は神だから。

よって、ダビデの子孫であり、ダビデの根でもあるのです。

どうしてこれらのことを話すかと言うと、驚きのコレ。

「ヨハネ、泣いてはいけない。愛する人々を思い、彼らが迫害されているのを見てあなたが泣いているのは分かっている。悪に満ちた文化、社会は際限なく続いていくが、その中を通り続けることはない。見よ、ユダ族のしし、ダビデの根が打ち勝った！」と、ここでユダヤ的表現が用いられています。

イエスが十字架にかかった時、総督ピラトは、ヘブル語、ラテン語、ギリシャ語で書かれた罪状書きを彼の頭上に打ち付けました。

宗教の言語であるヘブル語、政治的権威の言語であるラテン語、知性と文化の言語であるギリシャ語。

ピラトはその札に、最初にヘブル語で、「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」(ヨハネ 19:19) と書かせました。

するとユダヤ人たちは抗議して、「ユダヤ人の王、と書かないで、彼はユダヤ人の王と自称した、と書いて下さい。」(ヨハネ 19:21)

しかし総督ピラトは譲らず、「私の書いたことは私が書いたのです。」(ヨハネ 19:22)

ヘブル語で書かれた「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」

これはヘブル語で 4 語。

“Yeshua” (イエシュア) が最初の言葉で 1 語。

“Ha Notsri” (ナザレ人の)

“v'Melech” (王)

“Ha Yehudim” (ユダヤ人の)

『 Yeshua Ha Notsri v'Melech Ha Yehudim 』

イエス Yeshua の『Y』

ナザレ人の Ha Notsri の『H』

王 v'Melech の『V』または『W』…ヘブル語では V と W は同じ文字だから。

ユダヤ人の Ha Yehudim の『H』

『 Y-H-W-H 』

モーセが神に「あなたはだれですか。」と言ったのを覚えていますか。

すると神は、「わたしは『わたしはある。』という者である。」(出エジプト記 3:14) と言われました。

これが YHWH。

正式な発音はわからないけど、ヤーウェと発音するのが一番近いと思われます。

しかし発音はともかく、YHWH の 4 文字は主の御名ヤーウェなのです。

どうしてユダヤ人たちは「その名、YHWH を書かないで!!」と言ったのでしょうか。

それは、十字架にかかっているイエスの頭上の文字が示しているのは、主の御名ヤーウェだからです。

しかし総督は言いました。「私が書いた通り書くのだ。変わらない。」

これは偶然ではありません。

十字架にかかった主の頭上に 4 文字、『 YHWH 』ヤーウェ。

それがここに繋がってくるのです。

「ヨハネ、泣くんじゃない。ユダ族から出たしし、ダビデの根が勝利したのだ。」

ヨハネは振り返りました。

彼はきっと、巨大な吠え猛るししを想像していたことでしょう。

でも彼が振り返ると、

さらに私は、御座—そこには、四つの生き物がいる。一と、長老たちとの間に (黙示録 5:6)

彼は何を見たのでしょうか。

小羊です。

ギリシャ語では小さなペット用の小羊を指します。

「泣くな、ヨハネ。確かに地上は落ちぶれ、危険でメチャクチャになっている。でも全てをコントロールしているししがいるのだ。『ユダ族から出たしし！ダビデの根！』」

そこでヨハネが振り返ると、おお、小羊が見えた。

それも普通の小羊ではなく、ギリシャ語ではペット用の小羊。

それはただのペット用の小羊ではなく、ほふられた、殺された小羊。

私たちが天国に行ったら、その日はそう遠くないはずですが、私たちも小羊を見ると思います。

「**見よ、世の罪を取り除く神の小羊。**」(ヨハネ 1:29) とバプテスマのヨハネが言った通り、私たちが天国で見るのも小羊イエス。

その小羊に、ひとつ人間がつけたもの、それは小羊にある傷。

天国にあるもので、人間が造ったものはなにひとつありません。

彼の手の傷、額の傷、足を突き通し、脇腹を突き刺した穴以外には。

私たちは何を見るのでしょうか。

—その顔立ちは、そこなわれて人のようではなく、(キリスト、ほふられた小羊は) **その姿も人の子らとは違っていた—** (イザヤ 52:14)

私たちは、ほふられた状態の小羊を見るでしょう。

「ちょっと待って。列車や飛行機事故で死んだ人よりもひどいと言うのか？広島（原爆）よりも？」

はい。聖書にはこうあります。

その顔立ちは、そこなわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた— (イザヤ 52:14)

人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。 (イザヤ 53:3)

言い換えれば、「ワォ！」と感嘆するような容姿はなかった。

「どうしたら、列車や飛行機事故以上に悲惨な状態になれるのか。」

これは、髭が引き抜かれたり、槍が突き刺されたり、釘が手首に打ち抜かれたりというだけではありません。

主がゲッセマネの園で、「父よ、**みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。**」(ルカ

22:42) と言って、血のしずくのように汗を流した時に精神的、靈的に直面したことが、どれほど彼を痛めつけ傷つけたかは、天国に行ってほふられた小羊を見るまで決して理解できないでしょう。

釘が手首を貫いて、背中には打たれた傷。

勿論、間違いなくグロテスクです。

でも、他にも肉体的な拷問を体験した人はいるでしょう。

ではイエスの何が、他の人と違うのでしょうか。

彼は怯えていたのです。

ゲッセマネの園で、カルバリーの十字架上で彼は恐れていました。

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」**「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」** (マタイ 27:46)

恐怖は人を傷つけます。

心理的にも肉体的にも引き裂くことができるのです。

主が直面していたのは肉体的苦痛だけではなく、流されたのは血だけではありません。

私たちのヒーロー、救い主キリストが恐れていたのは、御父との関係から離されること。

彼はそれを知っていました。

父なる神、御父は御子に背を向けた。

それは、罪のないイエスが罪となったから。

誰の罪ですか？

私の罪！そしてあなたの罪！

そのため御父は背を向けた。

そのことがイエスをひどく怯えさせました。

御父から離れなければならないと知った時、血の汗が流れるほどに怯えたのです。

悲しいことに、一般的に私たちは、御父から離れるということに恐怖を覚えることはありません。

私たちが恐れるのは癌宣告。

「ああ!!」「ご臨終です。」そして私たちは悶え苦しむ。

でも誰かが「あなたは一日、御父から離されます。」と言ったら、

「ああ、そうですか。それは残念だけど、大したことじゃありません。」

そこで私は考えたのです。

「天のお父さん、私たちは、イエスが恐れたことを恐れていません。私たちは、イエスが心を騒がせるなど言ったことを恐れています。」

イエスが御父から離れることをひどく恐れ怯えたのは、彼が御父にとっても近く、御父からいのちを得ており、御父を愛していたからです。

御父は御子を愛し、御子は御父を愛していました。

それが彼の人生のすべてでした。

だから、ほんのわずかな間でも御父から離れることに怯え、血のような汗を流したのです。

それでもまだ他のことで泣いたり悲しんだりしますか。

最終的には大した問題でもないことに怯えますか。

最も大切なこと、御父とのつながりを、傲慢にも軽く考えていませんか。

酷く損なわれ、変わり果てた姿のイエスが通らなければならなかったのは、ただ十字架の苦しみだけではなく、御父に背を向けられるという非常に激しい苦しみ。

それは人類史上、未だかつてないほどのものでした。

私たちは、天国で彼を見た瞬間、初めて全てを理解するでしょう。

私たちを天国に行かせるために主が成されたことを見て、言葉を失うでしょう。

つづく

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。

神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。

すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。

神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。(エペソ 1:3 - 5)